

宗教現象学の再構築に向けて

宮嶋 俊一

金井先生と初めてお会いしたのは、ちょうど先生がポッフムでの研究滞在を終え、日本に帰国された頃であった。将来はドイツに留学したいと考えていた私にとって、ドイツ帰りの先生は私の憧れでもあった。

先生の印象を一言で言うなら、「大陸的」で「おおらか」ということになるだろうか。例えば、ゼミナールにおいて、学生の発表に対しその発表内容の枝葉末節を論うようなことはなさらず、むしろ、本質的なことをいつも質問された。ついつい細かいことに拘泥し、大局を見失いがちな学生にとって、先生のコメントは思考の本筋を再確認させてくれた。

だが、学生と接する際のそのような「大陸的」「おおらかさ」とは異なる、金井先生のもうひとつの面、すなわち「研究における緻密さ」を申し添えねばならないだろう。例えばそれは、ポッフム滞在の成果とも言える『ウェーバーの宗教理論』などを見れば明らかである。ウェーバーの著作の一つひとつに丁寧に向き合いながら、論考を重ねられてきた先生の姿は、普段教室で見せる「おおらかさ」とはまた異なる一面である。

このウェーバー研究を踏まえて、金井先生の御関心はさらに宗教現象学へと向かっていった。宗教現象学をテーマとした修士論文を書こうとしていた私にとって、この上もない僥倖であると同時に

に、いい加減なことは許されないという厳しさもあった。講義でも宗教現象学を取り上げられたが、そこでは学説史が丹念に辿られると同時に、表現主義と現象学のつながりを説明される際には教室に表現主義の画家たちの画集を持ち込まれ、それらの絵画について熱心に解説されていた。無味乾燥になりがちな学説史の講義の中で、暖かな時間が流れていたことを記憶している。

宗教現象学に向けられた先生の御関心は、ただ個人的なものであったわけではない。宗教学が社会学や人類学、心理学といった周辺諸科学との影響関係の中で学際的に発展・展開してきたことは周知の事柄であるが、先生はそのような学説史を振り返ったときに、宗教現象学の果たしてきた役割の重要性を強調された。すなわち、様々な方法論・研究対象が混在する宗教学においてはその「核」が必要であり、その「核」を担ってきたのが他ならぬ宗教現象学である。先生は宗教学の今後を考えたとき、宗教現象学の役割は看過されるべきではないこと、またそのためにも古典的宗教現象学を「批判的に継承」し、新たな宗教現象学を構築していくことの必要性を強く訴えられてきた。

この「批判的継承」というのは、金井先生が好んで用いられた用語である。学説史研究において、過去の研究成果をただ批判するだけではいけない。だが、無批判に継承するだけでは、何も新しいもの

は生まれない。必要なのは、批判すべきところは批判しつつも、継承できることを見出し、それを新しいものとして蘇らせていく、ということであろう。とりわけ、宗教現象学に向けられてきた厳しい批判に向き合いながら、古典的宗教現象学の「批判的継承」、さらには再構築に向けられた先生の熱意は並々ならぬものがあった。

そしてもうひとつ、先生は学のための学ではなく、宗教学の社会的役割にも強い関心を示されていた。その問題関心は『宗教への問い』という御著書に現れている。先生は現代日本における宗教状況を踏まえ、的確な批評を行っていた。とりわ

け、「オウム真理教事件」以降の宗教学者の社会的役割について強い関心を示されていた。

先生が退官されるということが私にはまだ信じられないのだが、私は先生が、宗教現象学研究をさらに展開されるのではないかという期待を抱いている。私も先生から受け継いだ「批判的継承」の精神と、宗教学の社会的役割への関心をさらに展開させつつ宗教現象学研究を進めたいと思いながらも、その道の険しさに戸惑っている。この道の先人として、先生にはまだまだご活躍を願わずにはいられない。